

『ロミオとジュリエット』におけるキスの一時性の意味は何か  
—ジュリエットのキスによる服毒の未達成—

## はじめに

ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の作品で四大悲劇としては扱われないが、おそらくは最も人気のある作品である『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1594)<sup>1</sup>は、今まで数々の別作品を生み出している。この人気の高いそして質の上でも十分に再考に値する『ロミオとジュリエット』について小論を展開したい。Paul A. Kottman は『ロミオとジュリエット』について“*Their love affair demonstrates that their separateness or individuation is not an imposed, external necessity, but the operation of their freedom and self-realization*”(6)と述べており外部からの影響によるものではなく、主人公たち自身に由来する自由意志、意図を特徴として挙げている。さらに似たような意見として、Matthew Spellberg は“*Romeo and Juliet* is a work in which fantasy is, in Burton's language, dramatically intended. As it is intended or willed by the two lovers, the perturbations it engenders take deeper impression, and deny the two of them any measure of self-control”(82)と語りやはり二人の意思と空想の関係性を示し、意思の中心的特徴を挙げている。この二人の批評家の述べる作品での意思の重要性で思い出されるのは、クライマックスであるロミオ(Romeo)の服毒自殺、そしてその死体を見たジュリエット(Juliet)の後追い自殺の試みの場面である。このジュリエットの自殺を試みる場面においても Martha Tuck Rozett は以下のように彼女の強い意志の特徴を挙げている。

For a moment, she experiences a fear of betrayal, followed by a horrifying vision of madness and loss of control brought on by the sights and sounds of the corpse-ridden tomb. Through an extreme act of will, she rouses herself from these nightmare imaginings and ends her speech with a desperate and courageous version of a festive toast:“ Romeo! Here's drink—I drink to thee ”(157)

このように意思の特徴が作品で重視されているが、本稿の重視するジュリエットによるロミオの口に残る毒を摂取しようとするキスの場面を引用してみたいと思う。

Juliet What's here? A cup closed in my true love's hand?  
Poison, I see, hath been his timeless end.  
O churl, drunk all, and left no friendly drop  
To help me after? I will kiss thy lips.  
Haply some poison yet doth hang on them  
To make me die with a restorative. (5. 3. 161-6)

毒を摂取しようとするジュリエットであるが命を失うのは、このキスによるものではなく剣での自害である。なぜキスの服毒よりも剣という性急な手段によって自殺を選んだのかと言えば、追手が迫っており時間的余裕がなかったからである。上に挙げた3人の批評家は作品の意思の重要性を述べていた。キスによる自殺の試みは、ジュリエットの強い意志である。このキスという一時的行為による服毒自殺が出来ない事の意味を本稿の論題としたい。キスとは通常愛の行為であり一時的行為である。この一時的行為が服毒という意図した目的を果たせなかつた事の意味を考えてみる。

## 1. ロミオとジュリエットの差異

この作品の主要人物はもちろんタイトルにもなっているロミオとジュリエットであるが、この節では二人の差異について考察してみたい。ロミオは作品の最初で“Not having that which, having, makes them short” (1.1.160) と浮かぬ様子で登場する。これは失恋によって出た言葉であり、登場の場面からロミオは恋する男としての性格が明らかである。さらに友人に恋について茶化されるロミオは次のような言葉を発する。

Romeo Love is a smoke made with the fume of sighs,  
Being purged, a fire sparkling in lovers'eyes,  
Being vexed, a sea nourished with loving tears.  
What is it else? A madness most discreet,  
A choking gall and a preserving sweet. (1.1.186-90)

恋に左右されるロミオ、恋によって自身の人生が決定される様子を述べているロミオである。彼の人生の指針は恋という感情によって決められるとも考えられる発言である。感情を代表とするような性格として、作品冒頭で登場している。このロミオについて Luis M. García Mainar はアイデンティティを探求する人物として“After the end of his search for identity the text shows his moment of entrance into masculinity by becoming actively engaged in a fight and by killing. This will be followed by his night with Juliet, sex becoming the climax of Romeo's journey towards manliness”(33) と語り、彼を男性性を獲得して成長する人物だとしている。果たしてこれは本当だろうか。確かに友人のマーキューシオ (Mercutio) を敵対する関係のティボルト (Tybalt) に殺され自身の剣によってその復讐でティボルトを倒すロミオは男性的である。この結果追放を命じられたロミオはジュリエットとの恋も終わってしまった事を嘆く。そして自殺をほのめかす。そんなロミオに修道士のロレンス (Laurence) はこう語る。

Friar Laurence Unseemly woman in a seeming man,  
And ill-beseeming beast in seeming both,  
Thou hast amazed me. By my holy order,  
I thought thy disposition better tempered.  
Hast thou slain Tybalt? Wilt thou slay thyself,  
And slay thy lady, that in thy life lives,  
By doing damnèd hate upon thyself? [...] (3. 3. 111-7)

ロミオは第三者から見ても弱さを示している人物である。男性性の獲得を遂げる人物というルイスの批評には賛成が出来ないのではないか。ルイスの述べるジュリエットとの性行為という男性性についても、言い換えれば恋心という感情の特徴による行為であり、作品冒頭の感情を主体とするロミオとの差は見られない。ジュリエットとの出会いによって新しい恋を見つけたロミオであるが、ジュリエットを知らなかつた頃のロミオとの差は果たしてあるのだろうか。恋心という感情によって人生の指針を決定するロミオに差は見いだせない。感情によって左右される人物、恋によって弱さを示すロミオは、成長していない登場人物である。冒頭のロミオと作品が展開した後のロミオに差はない。ロレンスという第三者の目から見ても弱さという感情の性格が明らかにされているロミオである。

では同じようにロミオに恋するジュリエットはどうであろうか。やはり変化は見られないのだろうか。結婚についてジュリエットは当初、親の意図を超える事はない。母親に“ Speak briefly, can you like of Paris’love? ” (1. 3. 98) と聞かれるジュリエットは“ I’ll look to like, if looking liking move. / But no more deep will I indart mine eye / Than your consent gives strength to make it fly. ” (1. 3. 99-101) とあくまで親の許しの範囲だけにとどまるという説明を行っている。親の影響力の元に自分が存在するという彼女の言葉である。しかし、ロミオとの恋の後はどうなるであろうか。ロミオが追放された後に乳母からはパリス (Paris) と結婚するのが一番、ロミオはパリスと比べたら雑巾であるとまで言われたジュリエットは、今まで乳母に従ってきたが乳母が立ち去ると次のような言葉を発する。

Juliet Ancient damnation! O most wicked fiend!  
Is it more sin to wish me thus forsworn,  
Or to dispraise my lord with that same tongue  
Which she hath praised him with above compare  
So many thousand times? Go, counsellor;  
Thou and my bosom henceforth shall be twain.  
I’ll to the Friar to know his remedy.

If all else fail, myself have power to die. (3. 5. 235-42)

親やその側にいる人間の影響力から脱した瞬間と言える。ジュリエットは恋によって変化した登場人物である。この事を Carolyn E. Brown はジュリエットはロミオを御する存在とし“ Although Juliet is one of Shakespeare’s youngest female protagonists, she in many senses is the most aggressive and self-contained in her pursuit of love and independence as she attempts to tame a wild falcon ”(335) と語り、恋と自立性の観点で述べている。しかし、ジュリエットは自立を獲得していく人物であるが、ロミオと違い感情主体の登場人物ではない。ジュリエットがパリスとの結婚を避けようとするのは、ロミオとの恋心によるものであるが、同時にロミオとの結婚の契りを既に結んでいる制度に対しての罪である。ロレンスにこの事を頼んだジュリエットの言葉は“ To rid her from this second marriage, / Or in my cell there would she kill herself ”(5. 3. 241-2) というように、重婚の罪を避けるにはどうすればいいか、という制度に対しての意識を失っていない。感情だけで動くロミオとの差は明らかである。さらにジュリエットは薬による一時的な眠りに落ちる前の恐怖においても、正当なるもの、この場合、家という存在を忘れない。墓の中にある何百年にもわたる先祖代々の骨に恐怖し、目が覚めたら狂ったまま先祖の骨をもてあそぶのではないか、そして狂気の末に遠い身内の骨で、自分の狂った頭をたたき割るのではないか、と第4幕第3場で独り言を述べる。彼女が恐怖する内容においても、家という存在は明らかであり、重婚の回避と同じように、家という制度、正当なるものの存在はわすれていない。恋によって変化はするかもしれないが、正当なるものに対しての意識を失う事はないジュリエットであり、ロミオの感情による行動方針とは大きな差がある。ジュリエットはロミオの存在をはじめて知った時に、“ My only love sprung from my only hate, / Too early seen unknown and known too late ”(1. 4. 251-2) と正反対の対を述べているが、この台詞がロミオとジュリエットの差異を表している。変化せず成長しないで感情に溺れるロミオ、変化はするが感情ではなく、制度や家の意識を失わないジュリエット。まさに正反対の対なのであり、二人には差異ある。ただし双方ともにそれを知らない。

## 2. 孤独の間違い

二人の恋人の悲劇は周囲に理解されない孤立が原因であるが、この節では作品中に見られる孤独の表象に注目し、孤独の間違いを明らかにする。まずロミオとマーキューシオの関係について考察してみる。ロミオにとってマーキューシオは自身で語るには親友と呼べる間柄である。ロミオはマーキューシオを大切に思っているが、マーキューシオはロミオを理解しているのだろうか。キャピュレット家の舞踏会に参加したロミオはジュリエットに恋するようになるわけだが、その後ロミオはジュリエットに会いたさからキャピュレット

家の庭に忍びこむ。ロミオは二階の窓に現れたジュリエットに対してその目を“Two of the fairest stars in all the heaven”(2.1.58)と表現し、ジュリエットを気高い存在としている。そして実際に二階にいるジュリエットを見ながらその声を聞いても“[T]hou art / As glorious to this night, being o'er my head, / As is a wingèd messenger of heaven”(2.1.69-71)と表現し、天使という言葉を使いながら、やはり気高い存在として描写している。自分より二階の窓という高い位置に立っているジュリエットは、その物理的な高さのみならず、精神的な意味でも高い存在としてこの場面では表現されている<sup>2</sup>。このようにロミオはジュリエットに対して天上の存在という高い敬意を表しているが、マーキューシオはこのロミオの恋をどう表現しているのだろうか。マーキューシオは一緒に忍び込んだ庭でこう語る。

Mercutio If love be blind, love cannot hit the mark.  
Now will he sit under a medlar tree  
And wish his mistress were that kind of fruit  
As maids call medlars when they laugh alone.  
O Romeo, that she were, O that she were  
An open-arise, or thou a popp'rin'pear. (2.1.34-9)

後にジュリエットを天上の存在として表現しているロミオと比べて、マーキューシオのこの言葉は、ジュリエットを女性器、ロミオを男性器である事を祈る、というような性行為そのものを暗示する野卑なものである。ロミオのジュリエットへの敬意とは全く違ったものである。マーキューシオはロミオへの共感は示していない。さらにロミオはジュリエットと修道士の前で誓いを立てた後の男女の契りで、結婚を形の上では経験する事になるわけだが、それを知らないキャピュレット家のティボルトは、ロミオに対して憎しみの言葉とともに悪党ゆえに決闘も辞さないという言葉をロミオに投げかける。ロミオはジュリエットと結婚しているゆえに、ティボルトが身内になっているのだから、この決闘を避けたいと考える。そして“Tybalt, the reason that I have to love thee / Doth much excuse the appertaining rage / To such a greeting”(3.1.61-3)という返事で事態を収めようとする。しかし、マーキューシオは“O calm, dishonourable, vile submission! / Alla stoccado carries it away. / Tybalt, you rat-catcher, will you walk?”(3.1.72-4)と事態を収めようとするロミオの態度を否定し、決闘の事態を引き起こしてしまう。マーキューシオはティボルトに剣で刺され命を失い、ロミオもその復讐にティボルトを倒す。親友と身内になった男の両方を失う事になる<sup>3</sup>。そしてこの後、ロミオは追放の処罰を受ける。マーキューシオのロミオを理解しない様子が明らかである。親友としてマーキューシオを考えてはいるが、マーキューシオではロミオに対して理解を示さず、むしろ不利な結果をもたらしている。

ロミオの孤独は親友と考えているマーキューシオとの関係で明らかであろう。ロミオのみについて説明した言葉ではないが、作品中の男性の攻撃性全般について語る Robert Appelbaum の“*They have to go forward, they have to stir, now as aggressor, now as the one confirmed in his title to aggress; but they also have to remain in that third position, from which they embark in pursuit of their objectives, the self*”(256) という言葉も“*the self*”「自己自身」を探求するという観点で、ロミオの孤独性の説明として適切ではないだろうか。では次にジュリエットと乳母の関係を見てみよう。乳母は当初、ジュリエットの理解者であり、ロミオとの修道士の前で誓いを立てた後の男女の契りを手助けした人物であった。はじめはジュリエットにとっても味方といえる人物だった。しかし、第1節でも説明したように、ジュリエットにとって乳母は味方ではなくなる。なぜなら愛するロミオを捨て、新しいパリス伯爵との再度の結婚を勧めるからである。ロミオよりも新しいパリスとの再婚という乳母の考えは、ジュリエットの気持ちを無視しているものでありこの意味でジュリエットは理解者を失った存在である。ロミオも孤独ならジュリエットも孤独な存在といえる。しかし乳母の意見は果たしてジュリエットの将来を考えた時に間違っているのだろうか。ジュリエットは乳母を罵り、第1節で示したように乳母や親の庇護を離れることになる。庇護を離れながらも重婚という制度から逸脱する恐れや家の意識を忘れないジュリエットであるが、結果的に乳母や親の考えに背く事によって不幸になる。ジュリエットは第1節で示したように制度や家を庇護を離れながらも忘れる事はない。そして乳母の考えはジュリエットよりもより現実的な安定を約束するものである。ジュリエットは制度や家の意識を持続するが、実際には社会から逸脱してしまう。乳母に理解されないジュリエットは孤独であり、結果的に置かれる境遇においても逸脱という意味で孤独である。Nathaniel Wallace はこうしたジュリエットの立場を“*She is unaware that within the familial oligarchy of Verona, such easy detachment of the individual self from one's position in the social order is not feasible*”(338) と説明している。ウォラスの言う社会からの逸脱は実現不可能という言葉は、ジュリエットの意識レベルでは正反対であり彼女は精神的には社会から逸脱している。制度や家の意識を持っているかもしれないが社会からは逸脱してしまう。そして実際に彼女の自殺もウォラスの言う社会からの逸脱実現の不可能さという説明に反し、逸脱行為と考えられる。逸脱と孤独の不幸が示されている。では最後に修道士ロレンスについて考察してみよう。ロレンスの登場の場面は以下のような独り言を述べている所から始まる。

Friar Laurence Within the infant rind of this weak flower  
Poison hath residence and medicine power:  
For this, being smelt, with that part cheers each part;  
Being tasted, stays all senses with the heart.

Two such opposèd kings encamp them still  
In man as well as herbs, grace and rude will;  
And where the worser is predominant,  
Full soon the canker death eats up that plant. (2. 2. 23-30)

庭の草を摘みながら人間の善悪について考察しているロレンスである。人生を達観している様子をうかがう事ができる。孤独とは言えないかもしれないが、独り高い立場にいる孤高の存在という印象を受ける登場の仕方である。修道士という立場上、高い次元にあり孤高の存在、孤独と似たような印象を与えるのは当然であるが、実際にこの作品の主人公、ロミオとジュリエットの双方に不幸をもたらしたのは、ロレンスの考えた計画なのである。ジュリエットが死んだと思い自害するロミオ、薬から目覚めたジュリエットがロミオの死体を見てやはり自害するのは、全て孤高であるはずのロレンスの計画の結果である。孤高という一人の存在、孤独とも近い存在の過ちが示されている。また上の引用の草と人間の善悪について、独り言を言っているロレンスは孤独をイメージさせるし独り言の最中にロミオが背後に登場するが、それに気づかず考察を続けるロレンスも彼の孤高さ、あるいはそれに近い孤独を印象付けている<sup>4</sup>。ロミオとジュリエットの両者を不幸にするのは、孤高と孤独の存在のロレンスであり、その意味でも孤独の間違いがロレンスにおいても示されている。

以上、親友と考えているマーキューシオから理解されない孤独のロミオ、乳母に理解されず、そして社会から逸脱してしまう孤独のジュリエット、孤高と孤独の存在のロレンスの行った不幸を生じさせる間違いなど、孤独の間違いが作品中で示されているのを明らかにした。ロミオとジュリエットは孤独同士が繋がり、社会からの逸脱という孤独の関係であり、それを手助けしたロレンスも孤高と孤独の存在である<sup>5</sup>。そして結果的にロミオとジュリエットは不幸になる。このように孤独の間違いが作品中では示されている。そしてそれぞれが自身の孤独について未知という特徴がある。

## 結論

本稿の目的は作品最後でジュリエットがロミオとのキスによる服毒自殺が出来ない事の意味を明らかにする事である。ロミオとジュリエットの恋は度々夜への言及がある。先に示したロミオによるジュリエットの目を二つの星と表現する事や、ジュリエットに否定はされるものの愛の誓いを月に例える事などである。また二階の窓に立つジュリエットと下にいるロミオが、互いの愛を言葉によって確認する場面も夜である。ここでその二人の会話を引用してみる。

Juliet [T]he more I give to thee,  
The more I have, for both are infinite.  
I hear some noise within. Dear love, adieu,—  
Anon, good Nurse!—Sweet Montagne, be true.  
Stay but a little; I will come again.

Romeo O blessed, blessed night! I am afeard,  
Being in night, all this is but a dream,  
Too flattering sweet to be substantial. (2. 1. 177-84)

奥で乳母に呼ばれて愛の会話を切り上げる様子、ロミオは幸せな夜であって夢であってほしくない、現実とも思えないと語る。第三者の呼びかけによる会話の中断、夜、夢、現実とも思えないなど、一時性が特徴として挙げられる。先に示したロミオが誓いを立てるがジュリエットによって説明され、否定された月の満ち欠けによる愛の不実さやジュリエットの二つの目を星に例える様子なども夜の間だけという一時性が特徴的である。二人の恋愛は一時性で説明できる。キスという愛の行為の一時性は、服毒自殺という本来の目的を果たせない。協同の愛の行為は一時性の中で目的を果たせない。この事はロミオとジュリエットの恋愛の一時性が実を結ばない事と一致する。そしてこの背景にはロミオとジュリエットの互いには気づいていない差異、そして二人の孤独の状況の間違がある。二人の恋愛は成立しない事を示す材料がある。William C. Carroll は最終場面の二人の状況について、“Since death is a necessary part of their love, then it is an end that is endless” (65) として継続性の不可能を示している。この事は一時性を特徴とする愛の継続の不可能さを示す。キスが目的を果たせない、愛の行為が意図した事を果たせない、つまり愛そのものの否定につながる一時性に対しての否定的側面を強化している。ロミオとジュリエットの恋愛の一時性、キスという愛の行為の一時性が目的を果たせない事が重なり、一時性の愛の存在の不可能性、恋愛の成就の不可能性を示している。二人が望んだのは夫婦として存続する永続性であり、これが二人の望んだ恋愛の成就である。しかし、一時性を特徴とする恋愛そのものを否定される事で恋愛の成就是否定される<sup>6</sup>。キスという愛の一時的行為が目的を果たせないのは、一時性そのものの存在の不可能さ、ロミオとジュリエットの一時的な恋愛の否定を表すものである。これが本稿の出した結論である。

作品タイトルの『ロミオとジュリエット』は互いが一緒の範疇という事をイメージさせるが、同時にこの並置は互いの分断もイメージさせる。四大悲劇には入っていないが、大変人気のあるこの作品は、これからもこの作品をアレンジした別の作品を、映画やドラマ、演劇で生み出し、そしてこの作品そのものについての研究も生み出し続けるであろう。

## 註

1. 以下、『ロミオとジュリエット』からの引用は、*Romeo and Juliet*, Oxford UP, Oxford World Classics (2008) の版に拠る。
2. ジュリエットの高い位置関係は、本稿の後で述べる下にいるマーキューシオによる彼女を女性器に例える野卑と精神的な意味で上下の対比になっている。
3. マーキューシオはロミオが彼をかばう腕の下から刺されが、ある意味ロミオの行動がマーキューシオが命を失う原因にもなっている。この意味でも二人の本質的な意味での、合致しない関係性、かけ離れた関係性が象徴されている。
4. ロレンスが毒を含む草と薬になる花々を一緒に籠に摘むこと、どんなに害あるものも、益を与えることが出来るということ、そして人間の美德も悪徳に変化するのは行動次第、という考察は後にロレンスがとった行動の結果に重なって興味深い。良かれと思ってとった行動が悪い結果を生むのは美德が悪徳に変化するのと重なる。
5. Rachel Prusko は、ロミオとジュリエットの孤独の関係について“*At odds with parents and community, Romeo and Juliet seek to inhabit spaces—physical, psychological, and linguistic—outside the world they know*”(119)と述べている。
6. 一応短いながらも性愛による成就ではあるという意見は、Ramie Targoff の“*First, that love is fleeting, brief, and restricted to this world; and second, that this temporal restriction intensifies and renders more precious the nature of erotic experience*”(31)というものである。

## 参考文献

- Appelbaum, Robert. " "Standing to the Wall": The Pressures of Masculinity in Romeo and Juliet. " : *Shakespeare Quarterly* , Autumn, 1997, Vol. 48, No. 3 (Autumn, 1997), pp. 251- 72. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/2871016>.
- Brown, Carolyn E.. " Juliet's Taming of Romeo. " *Studies in English Literature, 1500-1900* , Spring, 1996, Vol. 36, No. 2, Tudor and Stuart Drama (Spring, 1996), pp. 333-55. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/450952>.
- Carroll, William C. . " 'We were born to die': "Romeo and Juliet. " *Comparative Drama* , Spring 1981, Vol. 15, No. 1 (Spring 1981), pp. 54-71. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/41152929>.
- Kottman, Paul A. . " Defying the Stars: Tragic Love as the Struggle for Freedom in "Romeo and Juliet". " *Shakespeare Quarterly* , Spring 2012, Vol. 63, No. 1 (Spring 2012), pp.1-38. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/41350167>.
- Mainar, Luis M. García. " SHAKESPEARE'S "ROMEO AND JULIET", AND MALE MELODRAMA. " *Atlantis* , Diciembre 1998, Vol. 20, No. 2 (Diciembre 1998), pp. 27-42. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/41055511>.
- Prusko, Rachel. " Youth and Privacy in Romeo and Juliet. " *Early Theatre*, Vol. 19, No. 1 (2016), pp. 113-36, *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/90018273>.
- Rozett, Martha Tuck. " The Comic Structures of Tragic Endings: The Suicide Scenes in Romeo and Juliet and Antony and Cleopatra. " *Shakespeare Quarterly* , Summer, 1985, Vol. 36, No. 2 (Summer, 1985), pp. 152-64. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/2871190>.
- Shakespeare, William. *Romeo and Juliet*. Ed. Jill L. Levenson, Oxford UP, 2008.
- Spellberg, Matthew. " Feeling Dreams in "Romeo and Juliet". " *English Literary Renaissance* , WINTER 2013, Vol. 43, No. 1 (WINTER 2013), pp. 62-85. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/43607604>.
- Targoff, Ramie. " Mortal Love: Shakespeare's Romeo and Juliet and the Practice of Joint Burial. " *Representations* , Vol. 120, No. 1 (Fall 2012), pp. 17-38. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/10.1525/rep.2012.120.1.17>.
- Wallace, Nathaniel. " Cultural Tropology in "Romeo and Juliet". " *Studies in Philology* , Summer, 1991, Vol. 88, No. 3 (Summer, 1991), pp. 329-44. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/4174400>.